文化財をたずねて

No. 28

赤穂の中世城館を攻める！②

発行　赤穂市教育委員会
編集　文化財課文化財係
（赤穂市加里屋 81　TEL:43-6962 FAX:43-6895

⑥鍋子（なべこ）城（鍋子山城・大鷹城）【中山・東有年】

高雄地区（中山）と有年地区（東有年）にまたがる標高約 150 mの山塊は「鍋子山」とよばれ、古くから山城跡とされている。

『赤松家播備（ばんび）作城記』によると、神口重豊なる人物が元亀（げんき）年間（1570 ～ 1573 年）に居城していたとされている。その後、赤松家家臣の戸田（富田）右京が居城するが、3 年で八幡山城（大鷹山城・有年山城）へ移った後、備前の浦上宗景（うらかみむねかげ）に滅ぼされたという。その後に岡豊前守（ぶぜんのかみ）光広が天正年間（1573 ～ 1592 年）に居城したが、文禄年間（1593 ～ 1596 年）に破城となったとされている。

『播磨鑑（かがみ）』『播州赤穂郡志』では「東有年谷口大鷹城（又鍋子城ト云）」とあり、岡豊前守光広・小河丹後守秀春・戸田右京が居城したとし、同様に八幡山城へ城が移ったとされている。

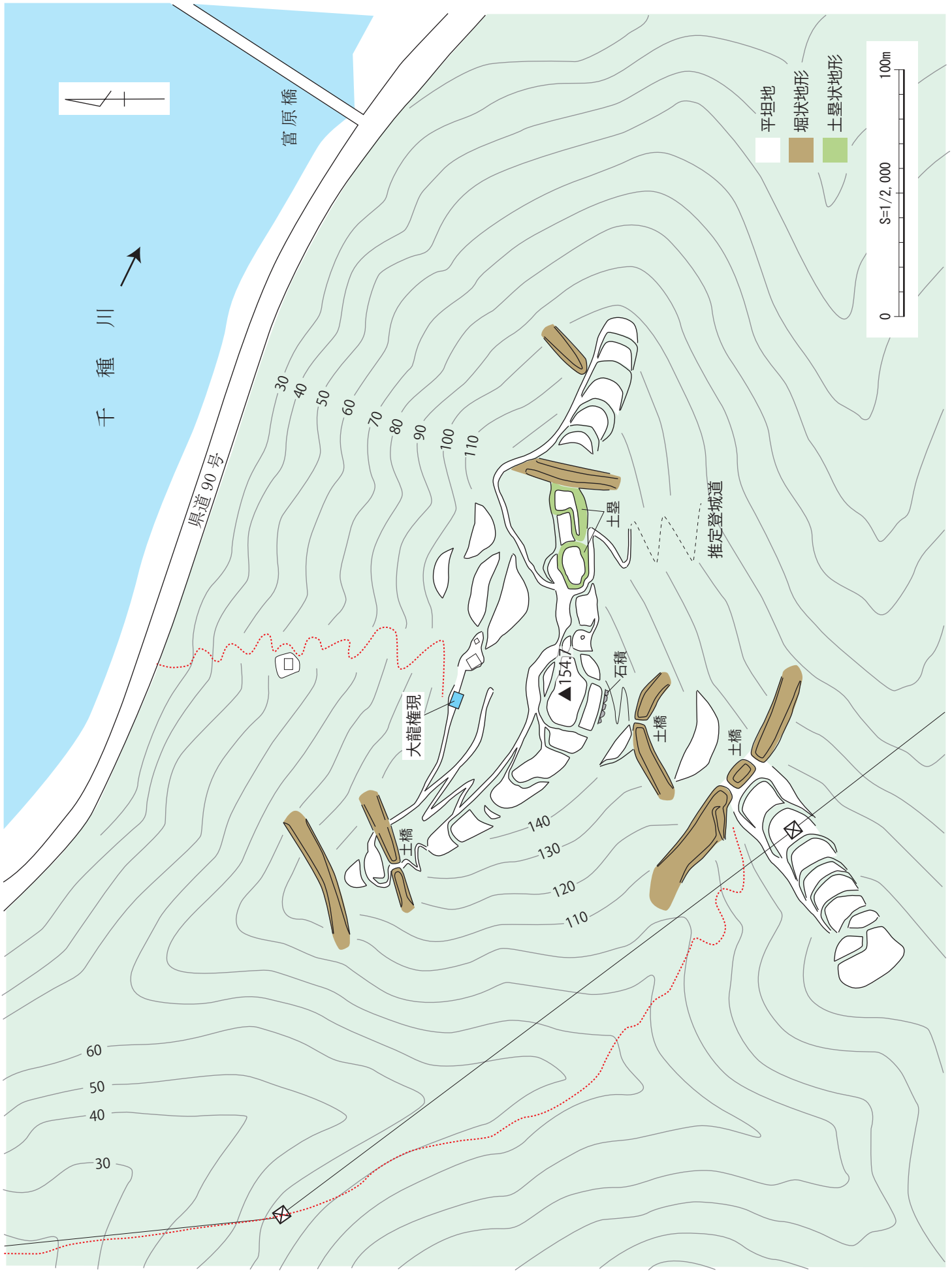
やや小型の城跡ではあるが、遺構の残存状況が非常に良く、多くの土橋や堀切、切岸や平坦面が確認できる。特に切り立った土橋や狭い尾根上に連続する平坦面、尾根を切り込む堀切、簡単な石積などから、当時の典型的な山城の様子がよくわかる。

また、城跡からわずかに下った場所に岩盤が洞穴のようになり、そこに湧水がたまっている。この湧水は「大龍権現（たいりゅうごんげん）」とよばれ、岡山県牛窓にまで通じているとか、龍が飲みにやってきたという伝説があり、古くから万病に効能がある霊験あらたかな湧水として信仰の対象になっている。

南からみた鍋子城

切り立つ土橋

城跡の石積


千種川
富原橋
県道90号
大龍権現
土橋
土橋
土橋
土塁
石積
154.7
推定登城道
30
40
50
60
70
80
90
100
110
140
130
120
110
60
50
40
30
平坦地
堀状地形
土塁状地形
0
S=1/2,000
100m

鍋子城　見取図

⑦鴾ヶ堂城（牟礼鴾堂ノ城）【有年横尾】

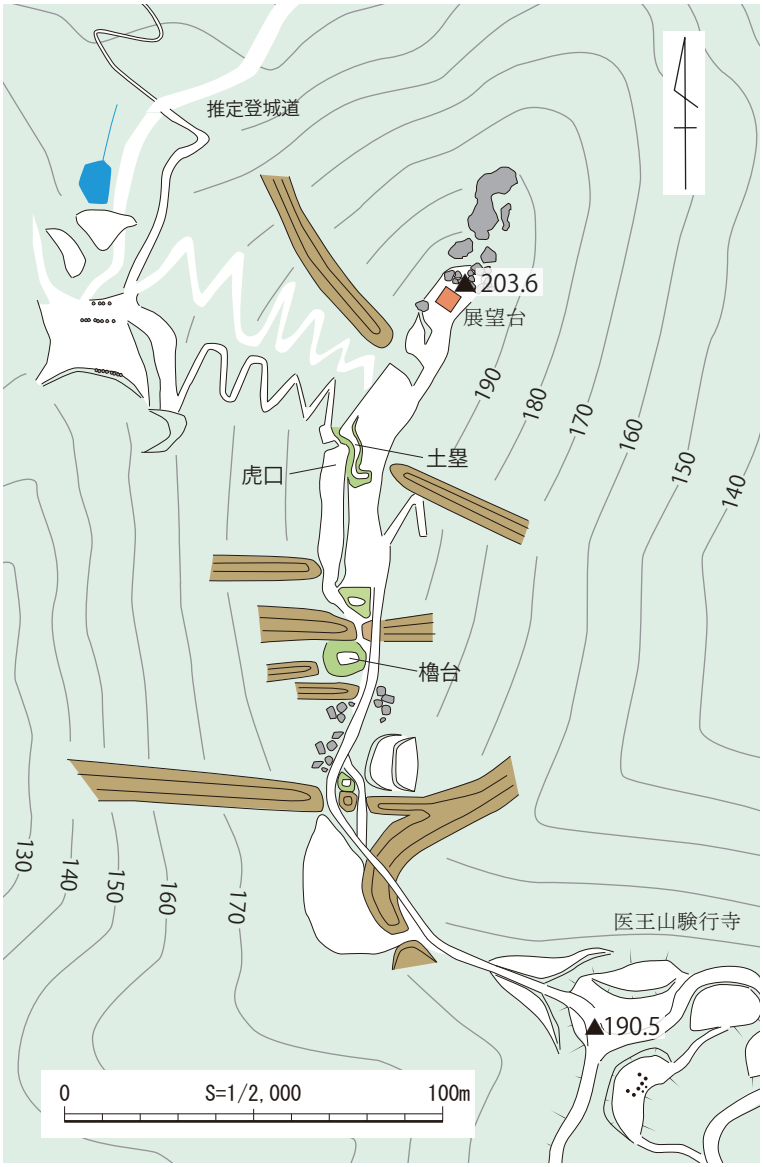
有年横尾地区にある標高約 200 mの山塊は「三重山」とよばれ、その頂上が古くから山城跡とされている。

『播磨鑑』『播州赤穂郡志』では小田（太田）弾正・小田治内が居城したという。元亀２（1571）年に赤松秀光の三男である小河丹後守秀春に攻められたが、東有年の住民の加勢により落城しなかったとされている。このときの戦乱で、城跡に隣接する医王山験行寺が焼失したという。

城跡には櫓台や虎口がみられるが、これは織田信長勢によって築城された城郭の特徴であるため、天正６（1578）年に羽柴秀吉勢が赤穂方面へ攻め入った際に、羽柴勢の拠点の一つとなっていたと推測されている。ただし、当時の文献には登場しないため、詳細は分かっていない。

近年の遊歩道整備などで地形が分かりにくくなっているが、現地では堀切や土橋がみられ、櫓台や虎口を構成する土塁などを見ることができる。また、市内の城郭では珍しく竪堀が多くみられ、特徴的である。

尾根の突端には展望台が整備されており、有年地区を一望することができる。



鴾ヶ堂城　見取図

北からみた鴾ヶ堂城

虎口部分の土塁

⑧尼子山城【高野】

南西からみた尼子山城

高野地区にある標高約 250 mの山塊が「尼子山」とよばれ、古くから山城跡とされている。

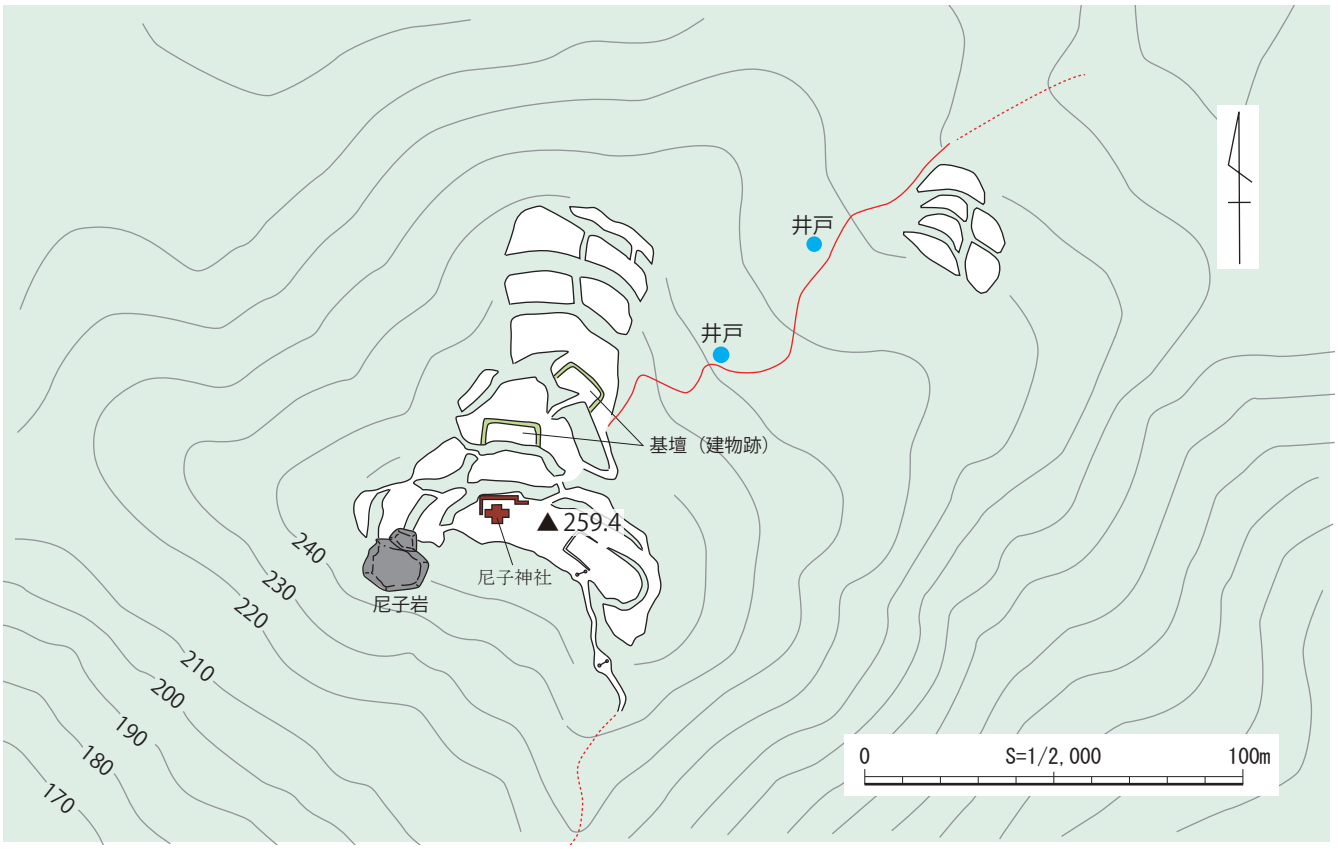
『赤松家播備作城記』によると、尼子将監義久が居城していたが、天文年間（1532～1555 年）に落城したとされる。その後、戸田氏（戸田右京か）が居城したが、天正年間（1573～1592 年）に落城したという。

『播州赤穂郡志』では尼子義久が居城していた永禄 6（1563）年に毛利元就に攻められ落城したとされ、その後富田采女（戸田右京か）が修復し居城したという。江戸時代には、山頂に祇園社が祀られており、雨乞いが行われていたことから「雨乞山」ともよばれていたという。

また城跡にまつわる伝説が多く残されている。山頂には通称「尼子岩」とよばれる巨石があり、戦のときには巨石を落とすつもりであったという伝説がある。また、城攻めの際に佐方（相生市）に住む老婆が抜け道を毛利軍に教えたために落城したという伝説や、この時刎ねられた尼子義久の首が浜市までとんでいったなどの伝説が伝えられている。

現在は山頂に「尼子神社」が祀られており、その背後に平坦面が連続している。平坦面には基壇（建物跡）がみられる。ただし、土橋や堀など、典型的な山城としての遺構は確認できていない。当時の文献にも現れないため、どのような城であったのかについては謎が多い。

山頂は眺望がよく、晴れた日には南側に淡路島・鳴門海峡・四国、北には広く中国山地を眺めることができる。



尼子山城跡　見取図

山頂の巨石「尼子岩」

城跡からの眺め

⑨茶臼山城【坂越】

坂越地区にある標高約 160 mの山塊が「茶臼山」とよばれ、古くから山城跡とされている。

明治時代に書かれた『赤穂郡誌』によると「宝珠山ハ大字坂越村ノ北ニ在リ。其山頂ヲ茶臼山トス。嘉吉元（1441）年六月赤松満祐将軍（足利）義教ヲ殺ス。八月、山名持豊、満祐ヲ白旗城ニ攻メテ之ヲ誅シ、茶臼山ニ拠レリ。赤松ノ余党之ヲ攻メ勝ズシテ走レリト云フ。」とある。ただし、この記述も他の文献とは矛盾があり、当時の文献や江戸時代の文献には茶臼山城についての記述が登場しないため、その実態は不明である。

現在は展望台として整備されているほか、アンテナなどが建てられている。山麓からは四国八十八箇所の石仏も祀られている。城跡としての遺構は全く確認できておらず、どのような城であったのかについては不明である。

大変眺望が良いことで知られ、生島と鍋島の浮かぶ坂越湾や千種川と赤穂市街地、明石海峡大橋から淡路島・家島諸島、四国までを一望できる。

南からみた茶臼山城

山頂の展望台

城跡からの眺め

⑩坂越浦城（坂越城）【坂越】

坂越の大避神社西側にやや小高くなった丘があり、この周辺が坂越浦城跡とされている。

『東寺百合文書』（「播磨国矢野庄供僧方年貢等算用状」）では享徳３（1454）年に「坂越浦城」「坂越城」として登場し、このころに築城が始まったものと考えられている。『赤松家播備作城記』でも「坂越城」として現れ、湯浅加賀守なる人物が最初に居城したという。その後、子である湯浅長門守則宗が居城したが、則宗は天正年間（1573 ～ 1593 年）に龍野城で亡くなったとされている。ちなみに湯浅氏は赤松家の家臣とされる。『播磨鑑』『播州赤穂郡志』では、「今（江戸時代後期）ノ番所ノ地也」とその場所が記載され、赤松下野守村秀の通城であったと記載されている。

城跡は江戸時代に赤穂藩の番所となったのち、旧坂越小学校や船岡公園となり、現在は展望広場と運動場になっている。展望広場の南側にも小さな丘があるが、ここにも城跡の施設が存在したのではないかと考えられている。城跡からは生島や坂越湾が一望でき、ここから坂越浦を出入りする船を見張ったものと考えられる。

南からみた坂越浦城

展望広場

城跡からの眺め

城跡の一部とされる旧坂越小学校跡地

⑪高山（今荒神の砦跡・塩屋ノ塁）【塩屋】

赤穂市街地北部にある標高約 160 mの高山の頂上に砦があったとの伝承がある。

『播磨鑑』『播州赤穂郡志』によれば「浮田記ニ云　赤松氏政則幼主ヲ輿テ下野前司政秀カ播磨鹽屋赤穂郡ノ塁ニ入ルト有　此古城ノ事カ又ハ鹽屋山ノ事ナルカ」とあり、塩屋地区の高山付近に中世の砦跡が存在する可能性が指摘されている。ただし、他の文献には登場しないうえ、この記述そのものがたつの市御津町にある塩屋城と混同されている可能性があるため、その実態は不明である。

現在、高山山頂は私有地のため立ち入りはできないが、広い平坦面となっており、周囲には石垣が巡っている。一説によれば、この石垣が砦の名残であるともいわれている。ただし、これまでの調査では明確に山城であることを示す証拠は見つかっておらず、どのような城であったのかについてはわかっていない。

付近からは赤穂市街地のほか、家島諸島・四国・鹿久居島までが一望できる。

石垣及び平坦地

山頂からの眺め

⑫加里屋古城（仮屋村古城・赤穂古城）【加里屋】

現在の赤穂市街地の中心に通称「加里屋古城」とよばれる城が存在したとされている。

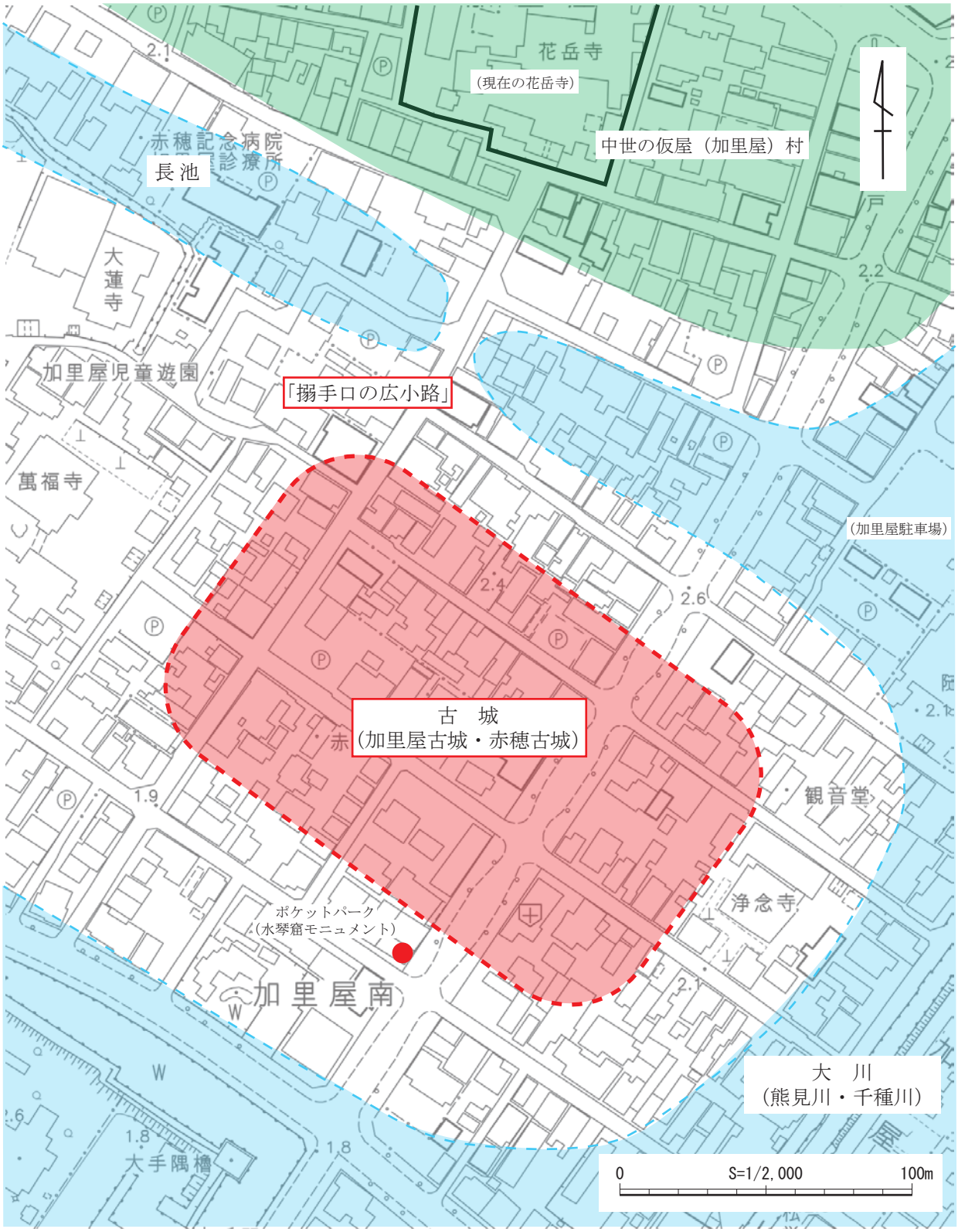
『播磨鑑』『播州赤穂郡志』によれば、南北の範囲は加里屋の一丁目から寺町の間の 66 間（『播陽萬寶知恵袋』『播磨鑑』）もしくは 60 間（『播州赤穂郡誌』）、東西の範囲は横町から大川（現加里屋川）までの計 7200 坪（およそ南北 120 m×東西 195 m）の範囲が「古城」とされていたという。

この城は岡豊前守光広が享徳年間（1452 ～ 1455 年）に築城したものとされ、もともとは「東有年谷口大鷹の城」（鍋子城）を移したもの、もしくは八幡山城・鍋子城の出城であったとされている。天正年間（1573 ～ 1593 年）には浮田（宇喜多）家家臣の津浪法印（角南（すなみ）法印か）によって、城はより南の城ケ洲（じょうがす）（現在の赤穂城三之丸跡）へ移され、跡地は町屋になったとされている。また花岳寺山門前の南 35 間（約 65 m）付近に、この城の「搦手口（からめてぐち）の広小路」があったという。

築城当時は対岸に港町として栄えていた中村（中広地区）があったため、港を押さえる城として築かれたと考えられる。現在の市街地では、北端は加里屋駐車場のやや南、南端はお城通りのポケットパーク（水琴窟モニュメント）、東端は加里屋川、西端は花岳寺参道までの範囲にあたる。

「加里屋古城」推定地

「搦手口の広小路」推定地



※川の範囲は推定。

「加里屋古城」周辺の推定復元図

※各城跡の位置は、№27 号巻末掲載の地図をご覧ください。